

内容を一にせるもので、歩兵、騎兵、砲兵、及び陣形學、運動學、戰法學、及び歩兵、騎兵、砲兵の戰法を取扱つて居る。

「海上攻守略説」四卷此の中卷一卷二は、海上砲術全書(安政元年刊)の卷二十七、二十八に當るもので、蘭人莫爾甸の著、イドラアト・ベイ・ヘット・ランデルリクト・イン・デ・ゼアルテルレリイ」のある部分の翻譯であつて、海岸攻守の事を取扱ひ、卷三、四は其の原書未詳であるが、營壘造法其の種類等が取扱はれてゐる。本書の見出し極めて不完全の爲、編者が増補を加へた爲、若干舊卷と面目を異したるもの止むを得まい。(菊判、上卷、約五〇〇頁、寫眞版一四、附圖六〇。中卷、約七〇〇頁、寫眞版四、附圖二、下卷、約四三〇頁、寫眞版八、附圖三八、東京、八敎會發行、非賣品)(田中)

○日英交通史之研究

武藤長藏著

「吾々が何等かの課題に就き探究せんとする時、先づ爲さねばならぬ事は、其に關し論究せる書籍には如何なるものがあるかを知る事である」。

昭和三年十一月御大典記念號として、長崎高商研究館年報「商業と經濟」の第九年第一冊に、日英交通史料(一)を初めて掲載されてより十年の永きに亙り、其豊かなる語學の智識を充分に活用、日英交通史の研究に専念せられて今茲に、其間の業績を更めて「日英交通史之研究」として世に問ひ、且後學の吾等を

教示せんとした著者の一貫して變らざる研究の態度は著者がサミュエル・ジョンソンの言葉として引用されたる上記の語に盡きる。されば、第一編日英交通史概観、第二編日英交通史料、第三編日英交通史の重要文獻、第四編舊(倫敦)東印度會社と我國との交通貿易再論の五編を以て構成せられたる、實に八百頁に垂んとする本書の大半は、日英交通史一特に初期の—に關聯する凡ゆる史料並に著書の紹介と解題に依て占められてゐる。私は凡そ日英交通史、殊に初期の其に關する物は、其關聯の緊密と價値の如何を問はず、能ふる限りに於て殆んど凡て収録せられ、而も一々冷徹なる精讀による解題に對する著者の絶大なる努力に對し、先づ敬意を表さざるを得ない。一見文字通りの概観に見ゆるかの如き第一編日英交通史概観も、其が他四編、就中第二編日英交通史料に紹介せられたる豊富なる史料を基礎としたる概観であり、從つて著者多年に亙る研鑽の結果の精粹であるを知る時、兎角僅少貧弱なる史料を得て早急、直ちに何等かの説を唱へんとし易き非才等に對する好き戒めと謂はねばならない。然し乍ら、淺學の身を以て僭越を敢てする事が赦されるならば、私が本書に依て幾多の教示を受けたる後抱きたるものは、本書が唯一の課題の下に著書として纏められたとは謂へ、其は要するに著者が從來發表せられし業績の再録—素より再録其物ではないが—に留つて、其處には整然として均衡を保てる論理體系をや、缺きはすまいかと謂ふ危懼である。秩序の缺除に就

いては、殊に第二編日英交通史料の輯録に於て其感を深からしめられた。著書は飽迄著書である可きであつて、便宜的再録であつてはならないと愚考される。

然し私の本書に對する更に大なる疑問は、歴史研究に於ても、先づ爲さねばならぬ事は、其に關し叙述論究せられたるものに如何なるものありやを知る事ではあつても、果して其が凡ていあらうか否かと言ふ事である。卓見に依れば、其は要するに歴史研究にとつても一つの手段、一つの不可缺の條件ではあつても、決して終局の目的ではないのである。第一編の概観に依ても窺知し得る如く、著者の態度も亦明にさうと拜察されるが、而も尙若干の疑問を抱かしめる程に、著者最大の努力は、日英交通史に關聯あるものは細大洩さず涉獵且解説する事に費されたるかの感を覚えしめるのである。

然し以上は、決して本書の眞價を損ふものではなく、「史學雜誌」第四十八編第九號の小野氏、「歴史學研究」第七卷第六號の下村氏等の本書に對する高評の如く、著者に依る新なる見解、新なる史實の發見並に貴重なる諸史料の紹介等は、著者の撓まざる研鑽の輝ける業績をして、更に光彩を放たしめるものと謂ふ可きであらう。

題して「日英交通史之研究」と謂ふ。而も其は初期の其に全力を傾倒せられた。然し乍ら、日英交通の重要性は寧ろ、十九世紀後半、即ち幕末開國以降に存する。淺學菲才を願ざる妄評を謝しつゝ、著者の益々健祥と其鋭き研究の眼を斯る分野にも及

ぼされ、吾々を啓蒙指導せられん事を望んで已まない者である。(内外出版印刷株式會社發行、定價六圓五拾錢)(西井克己)

○英國社會經濟史 封建社會

矢口孝次郎著

大正末期から昭和の初頭にかけて社會運動の波が吾國にも押寄せ、社會問題・經濟問題が人々の注意のすべてを占めた時、吾國の史學思想もまた前代のそれに對して一の轉回を完成した。大正中期の所謂「昂揚期」を背景としてさかえた「文化史學派」に代つて、いはゆる「社會經濟史學派」がその隆盛を見出したのは、かゝる零團氣の中に於いてであつた。此の時以來、種々の社會經濟史關係の書物、或は斯くの如き表題を冠した雜誌や叢書の類の刊行が一の流行となつた觀さへあり、従つて現在歴史を學ぶ吾々に對して、少くとも量的に見て最も多くの直接的遺産が此の方面に於いて殘されてゐる譯である。此の遺産を如何に繼承し、如何に發展せしめるかは、専ら現在の及び今後の吾々に義務づけられた課題であることは云ふまでもないが、然し一口に「社會經濟史」と云つても、そこには區別されるべき二つの立場が含まれてゐることを注意しなければならぬ。一は、社會の經濟過程のみを對象とする云はゞ部分史的立場であり、他は、かゝる經濟過程の分析を通じて當該社會全體の構造的聯關を把握し、之によつて各時代に固有な文化の性格の理解に進まうとする立場である。今吾々がこゝに紹介しやうとする、關